

2019年1月		
筆者	所属	千葉県農林総合研究センター 病理昆虫研究室
	職名及び氏名	研究員 青木 由
題名	ナシ黒星病に対する花芽の基部の防除適期	

ナシ黒星病は千葉県のナシ栽培における重要な病害です。最近には主に開花期に用いられるDMI剤に対する耐性菌が他県で確認されるようになったことや多発生年が続く傾向があります。

本病害の第一次伝染源は感染した花芽の基部(写真1参照)と前年の被害落葉です。前者は、秋に腋花芽の鱗片に感染した菌が冬に鱗片組織内で病斑を拡大させて分生子を形成し、花芽の基部に達することで春に発病します。このため、春先に花芽の基部を防除することが重要です。



写真1 花芽の基部の説明

そこで、花芽の生育段階である休眠期から鱗片脱落期(写真2参照)において、予防剤の散布適期を明らかにする試験を実施しました。その結果、催芽期と発芽期に予防剤を散布した場合の防除効果が比較的高く、休眠期及び出蕾初期並びに出蕾期に散布した場合では防除効果が低くなりました。また、暦の上での散布時期としては、多くの花芽が催芽期及び発芽期にあたる3月中旬と下旬に計2回散布した場合の防除効果が比較的高くなりました。このようなことから、催芽期および発芽期が予防剤の散布適期といえます。

また、圃場内の樹により芽の生育には個体差はありますが、春に発病が多く見られるのは長果枝先端の腋花芽です。このことから薬剤散布のタイミングは長果枝の先端部分の腋花芽が催芽期から発芽期に至ったタイミングで実施することが好ましいと考えられます。

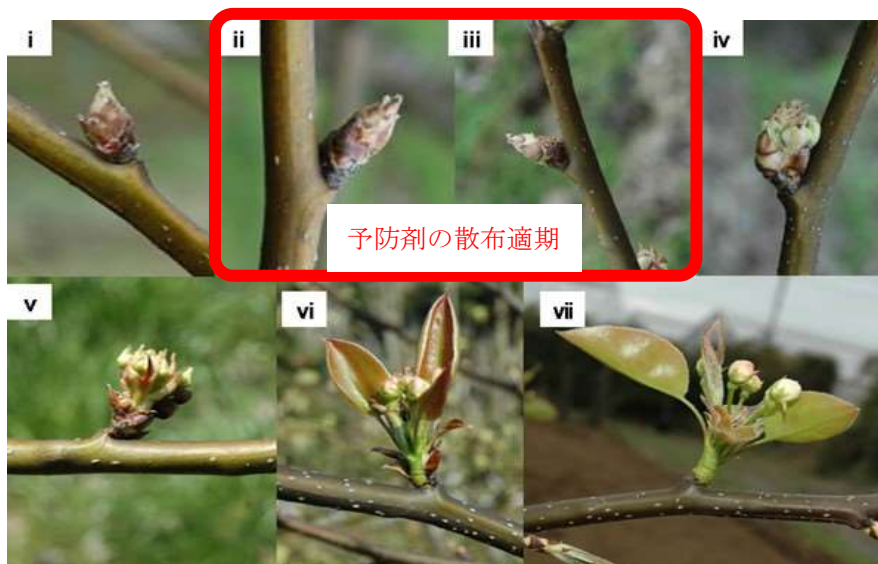


写真2 花芽の各生育段階の様子

- 注) i : 休眠期 : 休眠状態にあると思われ、鱗片生組織が見られない  
ii : 催芽期 : 芽基部等に鱗片生組織が見られる  
iii : 発芽期 : 生組織が枯死組織との割合が外観で半々の状態  
iv : 出蕾初期 : 蕾が外観から確認できる  
v : 出蕾期 : 蕾組織が芽鱗片から外側に伸長している  
vi : 展葉期 : 葉の展開が始まっている  
vii : 花蕾期 : 白色の花弁が明瞭に確認できる  
※鱗片脱落期はv、vi、viiの時期に相当する